

2021年9月26日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書1章16～20節

説教題：わたしについて来なさい

カナダで最初に入學した学校は、メノナイトの聖書学校でした。私は、その学校のESLのクラスで英語を勉強したのですが、そこで、良く目にしたり、耳にしたりした言葉がありました。「ディサイプルシップ」という言葉です。日本語に訳すと「弟子の道」です。「弟子」と聞くと、私は落語の世界を連想してしまうのですが、しかし信仰の世界にも言えることなのだと教えられました。「イエスを信じて信仰生活を送る」ということは、「イエスの弟子としての道を歩くことだ」という理解だと思いますが、若いクリスチャン達に、そのことが熱心に教えられていました。私達は、普段「弟子」という言葉はあまり使いませんが、イエス様は、例えば「マタイ28章」で「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」（マタイ28:19）と言われました。また「使徒行伝」では「ダマスコにアナニヤという弟子がいた」（使徒9:10）等々、信者のことが「弟子」として表現されています。その意味で私達は「宮崎県にいるイエス様の弟子」であり、それが私達のアイデンティティーをより相応しく表現する言葉なのかも知れません。その「主の弟子」について、「弟子とはどのような者か」、「弟子はどのように生きるのか」、そのようなことを教えるのがこの箇所です。2つのことを申し上げます。

1: 「弟子」とはどのような者か～主に招かれた者

イエスは、故郷のガリラヤに帰られ、そこで宣教活動を始められました。第一声は「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」（15）という言葉でした。「あなた方の祈りに神が答えられる時が来た。神の国はすでにここに来た。神の恵みの支配が今ここにある」ということです。宣教を始められたイエス様は、すぐに一緒に活動する「弟子」となる人々を呼び集められます。この記事は、最初の4人を召される様子を描きます。

イエス様が「弟子」として最初に招かれたのは、どのような人達だったのか。それは一言でいうと「普通の人々」でした。当時の歴史家ヨセフスは、330隻の舟がガリラヤ湖で漁をしている様子を伝えています。彼らは、そのように沢山いる漁師だったのです。また後に権力者は、彼らのことを「無学な普通の人」（使徒4:13）と呼んでいます。「無学な」というのは「律法の専門教育を受けていない」ということです。そのように神の子が同労者として最初に召されたのは、身分のある人でも、学問のある人でも、宗教の専門家でもなかったのです。いわゆる「普通の人々」だったのです。

しかしです。16節の「シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった」、19節の「ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネをご覧になった」、この2つの「ご覧になった」という言葉は、「ぼんやり眺めた」という意味の言葉ではありません。「じっと見つめた、するどく見つめた」、そういう意味の言葉です。イエス様は彼らに「人間をとる漁師にあげよう」（17）と言われますが、漁師はプロの目で魚の動きを見て獲るのです。イエス様は、彼らを「人間をとる漁師」にする前に、ご自身がプロの目を持って彼らを見られ、そして招かれたのです。彼らは、人間的には普通の人々でした。しかし神様の目には、また別の見方があったのです。

ある本にありました。教会の歴史の中でこの箇所は問題になった箇所だそうです。教会が受けた攻撃の中に次のようなものがあつたようです。「教会というのは、どのようにして始まったのか。リーダー達はどんな連中か。イエスという男に『ついて来い』と言われて、十分考えもしないでついて行った連中ではないか…大の大人がすることか。ただ『ついて来い』と言われて付いて行った。何という思慮の無さ。キリスト教会とはそんなふうにして始まった軽薄な団体だ」。この箇所を読むと、私もそう思います。「ついて来い」と言われて、何も考えないでついて行くものだろうか。網を捨て、舟を捨て

て、身内を捨ててついて行った、何も理由がないとしたら軽薄そのものです。しかし、ここには書いていませんが、彼らには心のドラマがあったのです。他の「福音書」を読むと、彼らはここで初めてイエス様に会ったわけではありません。バプテスマのヨハネからも推薦を受けています。また、それまでもイエス様の話を聞き、イエスというお方について彼らなりに考えていたはずで、その結果として「イエスこそ我々が待っていたメシア(救い主)だ」という結論を持っていたのではないのでしょうか。

しかし「マルコ福音書」は、彼らの動機を一切書きません。なぜ書かないのか。それは、「彼らの動機」以上に大切なことがあるからです。それは「イエス様が漁師の目で彼らを見て招かれた」、つまり「イエス様の側の動機、神様の側のイニシアティブ(主導)」を強調しているからだと思います。彼らが「十分な動機、はっきりとした理由」を持っていたことが大切なのではなく、「イエス様が彼らと呼ばれたこと」の方が大事なのです。

もし「彼らの動機や理由」が大事だとしたら、どうなるでしょうか。ペテロはイエス様が大好きでした。しかし、彼もいつもイエス様と心をつなげて歩いたわけではありません。イエス様から「サタンよ、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をするものだ」(マタイ 16:23)と言われる時もあったのです。激しい言葉です。私だったら「そこまで言われてついて行く必要はない。俺は辞める」と言うと思います。しかし、それでも彼は、躓きながらも最後までイエス様について行くことが出来ました。それはペテロの方に「十分な動機、十分な理由」があったからではありません。ペテロが誠実な人だったから、信仰の生涯を全う出来たのではありません。神様の方に動機があった、神が「ペテロの信仰の状態」の云々を超えてペテロを導かれたからです。だから、挫折があり、失敗がありながら、彼はイエス様の後を歩き続けたのです。

この記事は、私達を励まします。私達はどのようにして神様に繋がる—(繋がった)—のでしょうか。私達の方に「神様を信じるのに十分な動機」があり、十分考え抜いた結果、「これこそ正しい」と思ったからでしょうか。そういう面もあるかも知れません。しかし、もしそれだけだったら、私達の心がぐらついたらどうなるでしょうか。「あの時は確かにそう思ったけれど、良く考えてみたらそうではなかった」と思い始めたら、どうなるでしょうか。もしかしたら、そこで終わりです。しかし、そうではないのです。

CS ルイスという 20 世紀を代表するキリスト教の作家がいます。彼は 60 歳を過ぎてから初めて結婚をしますが、その時には既に妻となる女性はガンに冒されていました。一時的に奇跡的な回復を見せますが、3 年後に妻は亡くなってしまいます。その悲しみの中で「悲しみをみつめて」という本を書きます。この本には、やり場のない悲しみ、悲しみの故の神に対する怒りや非難が書いてあります。信仰は危機に瀕しています。それこそ「神が何だ、信仰が何だ」という感じです。しかし、そのことを通して彼は、「自分が『信仰だ』と思っていたものが、いかにもろいものであったのか」、その真の姿がさらけ出されるのを感じるのです。しかし同時に、自分の信仰の状態がどうであるかを越えて、それもこれも包み込んで彼を導いて行かれる神様に気付くのです。言葉を換えれば、彼の神との関係は、彼の信仰にかかっていたのではないのです。神の方が彼を導いておられたのです。

私達にとっても、神様と私達との関係というのは、きっと「私達の側の動機や理由」を土台としたものではないのです。「神様の側の動機や理由」こそが大切なのです。なぜ私達なのか、それは分かりません。しかし神様の側には、私達を招かれた理由があるのです。だから私達は勝手に信じるわけではないのです。先程「もしペテロ達が理由も動機もなしにイエスについて行ったのなら、軽薄そのものだ」という批判があったと申しあげました。しかし「マルコ福音書」は、ペテロの言ったことをマルコが書いた福音書だと言われます。つまり「『ついて来なさい』と言われて、すぐについて行った」ということを言っているのは、他ならぬペテロなのです。それは何を意味するかと言うと、ペテロは

「イエス様が私に突然出会って下さったのだ。それが全てだ」と言っているのではないのでしょうか。私達が神を見上げているのは、神に招かれたからであり、それはまた、イエス様が私達それぞれに、不思議な仕方出会って下さったからではないのでしょうか。イエス様は言われました。「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません」(ヨハネ 6:44)、「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです」(ヨハネ 15:16)。いずれにしても、神様(イエス様)が私達を選んで下さった。だから私達の信仰が時にどんなにぐらつこうとも、神様との関係が回復されて、また導かれて行くのです。イエス様の「弟子」というのは、自分からなろうと思ってなれるものではないのです。神様に呼ばれてなるのです。それが「弟子」です。私達はそのもの凄い特権に生かされているのです。「私はイエス様に選ばれて、『わたしについて来なさい』と呼ばれた者である」、そのことを心に刻みたいと思います。

2: 「弟子」はどのように生きるのか～主の言葉に従い御国を生きる

この箇所が「イエスの弟子」について教えるもう1つのことは、「彼らがイエス様に応答した、イエス様に従った」ということです。漁師である彼らが、網を捨て、舟を捨て、イエス様について行きました。なぜついて行くことが出来たのでしょうか。それは、イエス様が「神の国はすでにここにある」(15)と言われたように、彼らに働く「神の国—(神の導き)」の現実によって彼らは立ち上がることが出来たのです。しかし逆も言えます。イエス様は「神の国は来ている」と言われました。しかし現実問題として、見えない「神の国」がどのようにして彼らにやって来たのか。彼らがイエス様の招きに応じて従った時に、彼らにとって「神の国」が現実的なもの、具体的なものになったとも言えるのです。

それは、私達も同じです。「神の国」、「神の恵みの支配」は来ています。しかし見えません。それがどうやって私達にとっての現実となるのでしょうか。それは、私達がイエス様の招きに応える時に、私達は、見えない「神の国」に引き入れられ、「神の国」を経験するのではないのでしょうか。

アーネスト・ゴードンという人の書いた「死の谷を過ぎて～クワイ川収容所」という本があります。第二次大戦中、日本軍は「泰緬鉄道」というタイとビルマ(ミャンマー)を結ぶ鉄道を建設しました。その鉄道工事に連合軍の捕虜を使ったのです。日本軍は「数年かかる」と見られた工事を、1年8か月の突貫工事で仕上げました。その結果「枕木1本当たり1人が死んだ」と言われる程の過酷な工事となりました。と同時に、その収容所では日本兵による捕虜への酷い取り扱いがありました。捕虜達は日本兵を赦せなかったのです。しかしその地獄の収容所の只中で、彼らは仲間のキリスト者の生き方を通して、だんだんと神に対して目が開かれ、神を信じるようになって行くのです。

「死の谷を過ぎて」に次のような箇所があります。ゴードン達は、日本軍の命令で移動することになりました。その時、ある地点で、線路の前方に列車が停まっているのに気付きます。それは、ビルマでの戦闘で役立たなくなった傷病兵達を乗せた日本軍の列車でした。ゴードンの目には、彼らは、使い果たされた消耗品、戦争の廃物に見えました。その時です。ゴードン達の班の将校のほとんどが一言も発せず、自分達の雑嚢を開き、配給された食糧や布切れ、水筒を持って日本兵の列車に近づいたのです。そして憎くてたまらないはずの日本への傍らにひざまずいて、水と食べ物を与え、膿を拭き取り、傷口に布を巻いて上げたのです。すると、彼らが列車を離れて行く時、日本軍の負傷兵が、「アリガトウ! アリガトウ!」と何度も、何度も叫ぶのです。それまでは「バカヤロウ!」しか聞いたことがなかったのです。ゴードンは書いています。「私は、そして仲間は、この血痕で汚れた鉄道列車の中で神からの恵みの瞬間を体験した。私達は神の恩寵に浴していると感じた…嬉しい神の恵みの力に思いをめぐらせているとき、私はイエスの言葉をふと思い起こした。『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分

の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです』(マタイ 5:43~45)。

私は、彼らが「神の国」の現実を経験しているのを感じるのです。この証が教えるのは、私達はイエス様の呼びかけに応答することによって、イエスの言われた「神の国」を経験して生きることが出来るということです。「メノナイトの信仰告白」という本にも「生活の中でキリストに従って行くにつれ、神とのより密接な関係の中に導き入れられる」とあります。

そしてそのことは、私達が「神の国」を経験するというだけでなく、私達がイエス様に呼びかけられた使命にも関わるのです。イエス様は弟子達に「人間をとる漁師にしてあげよう」(17)と言われました。彼らが召された第一の理由は、「人々にイエス様を紹介する、そのようにして『神の救い』に与ってもらう」ことです。私達も同じでしょう。それはどうやって可能になるのか。それは「私達がイエス様に従って生きる生き方を通して、『神の国』の現実、豊かな恵みを経験して、その喜びをお伝えする」、そのようにして行われるのではないのでしょうか。ここでペテロは色々なものを捨てました。しかしそのすぐ後で、彼はイエス様を家に連れて来て、イエス様に姑を癒して頂くのです。イエス様に応答することは、「神の国」の祝福を経験することだと思います。私達には、自分の力ではどうすることも出来ないことがあります。そんな私達に「神の国」は祝福をもたらすのです。私達も、主に従うことで、それを経験出来るのです。「弟子」とは主の言葉に従いつつ、御国を生きる者なのです。

3:最後に

今日、2つのことを申し上げました。「私達は主に招かれた者である」、そして「私達は主に従いつつ、御国を生きる者である」。信仰者というだけでなく、イエス様の「弟子」としての思いを持ちつつ、イエス様の背中を見つめて、イエス様について行きたいと願います。